

## 理事長エッセイ

「子曰く、学<sup>まな</sup>びて時にこれを習<sup>まな</sup>う、  
亦<sup>また</sup>た説<sup>と</sup>ばしからずや」



公益社団法人日本畜産学会  
理事長 小澤 壯行

先日、95歳の父が生涯を全うしました。彼の机を片付けていたとき、岩波文庫の『論語』が無造作に置かれているのが目に入りました。その冒頭の一節が、このエッセイのタイトルです。言うまでもなく、『論語』は孔子を中心とした言行録です。二千年以上前に書かれたにもかかわらず、不滅の古典として、今なお重要な教えを私たちに示してくれます。

タイトルの意味は、「先生(孔子)が言いました。学んで、それを適切な時に復習するのは、なんと喜ばしいことだろう(理解が深まり、成長していくからだ)」というものです。この一節を目にしたとき、私は思わずその言葉に心を奪われました。

1988年に修士課程を修了して以来、私は畜産、特に酪農経営研究に身を置いてきました。数えきれないほど多くの農家を訪問し、「畜産経営学」の研究者としての自負も育ちました。しかし、36年にわたって専門研究を続けていると、自分がいつの間にか「天狗」になっていたことに気づかされる瞬間があります。

そのきっかけとなったのが、今年9月に京都大学で開催された第132回大会でした。この大会は、畜産学会創立100周年を祝う記念大会でもありました。大会初日の16日には、創立100周年を祝う記念式典とともに、公開講演会が行われました。テーマは「畜産学100年の歩みと未来展望：先端科学に基づく飛躍的な進化」で、一般市民や近隣の農業高校の生徒たちも多く来場し、約300名が京都大学百周年記念ホールに集いました。当初、会場が空いてしまうのではないかと心配していましたが、それは杞憂に終わりました。

講演では、畜産の歴史を専門家の先生方が分かりやすく解説してくださり、その後のディスカッションも非常に学びが深いものでした。さらに、

これらの講演概要に加え、「日本畜産学会の歩み」や「各専門領域の展開」と題したレビュー、さらには「地域別畜産学会の歴史」などを収録した「日本畜産学会創立100周年記念誌」が後日刊行される予定です。

翌9月17日と18日に本大会が開かれました。若手会員による優秀発表賞のセッションは熱気にあふれ、一般講演では最先端の研究成果に触れることができました。また、18日の公開シンポジウム「日本の畜産研究は、世界に冠たる和牛生産をいかに実現したのか」では、世界市場でWAGYUが席卷するなか、日本の「和牛」こそがその頂点にあることが証明されました。

この大会を通じて改めて実感したのは、孔子が語る「学<sup>まな</sup>びて時にこれを習<sup>まな</sup>う」、すなわち学びを積み重ねていくことで理解が深まり、さらに高みに達するということです。これまでの自らの研究を振り返り、新たな知識を加えることで、研究の楽しさがさらに増していくことを体感しました。

私が敬愛する東北大学名誉教授の佐藤英明先生は、かつてこうおっしゃいました。「一般の方に自分の研究分野を尋ねられたら、畜産学を専門としていますと答えるようにしている。つまり、畜産学者だ」と。一般の方に詳細な研究内容を説明するのは難しく、たとえ説明できたとしても理解される保証はどこにもありません。ですから、それ以降私も佐藤先生にならい、「私の専門は畜産学です」と胸を張って答えるようにしています。

私たちが拠り所とする畜産学は非常に奥が深く、その究極に到達することはおそらく一生をかけても難しいでしょう。だからこそ、「学<sup>まな</sup>びて時にこれを習<sup>まな</sup>う」姿勢が、研究者としての不可欠な資質だと思うのです。

**【再度のお願い！】**

皆さん、見過ごしているかもしれませんが、学会 HP のバナーに「畜産用語辞典」があるのをご存じでしょうか？かつては冊子版として養賢堂から刊行されていた辞典が、最新の内容を取り入れ、Wikipedia 方式で構成されています。畜産学の最新情報を簡単に確認でき、さらに「無料で使いやすい」仕組みが整っています。これは、公益法人としての学会が行う社会貢献活動の一環です。ぜひ一度、バナーをクリックしてご利用ください。



公益社団法人日本畜産学会創立 100 周年記念式典は成功裏に終わりました。